愛と自由――『カトリック教会の道徳』と『真の宗教』を中心に

菊　地　伸　二

はじめに

本論では、アウグスティヌスの『カトリック教会の道徳』と『真の宗教』という二つの著作を取り上げ、とくに「愛と自由」の関わりの問題について検討してみたい。

この二つの著作は、彼の若い時期に書かれたものであるが、両者共に神に向かう人間、すなわち神を愛する人間の姿を真正面から捉えており、それと同時に人間が神に近づくほど自由になるという考えが表明されており、その意味で「愛と自由」というテーマが共通して流れていると思われる。

そこでここでは以下の順序で論を進めていくことにしたい。

第1章　『カトリック教会の道徳』という作品
第2章　『カトリック教会の道徳』の構成と概要
第3章　『真の宗教』という作品
第4章　『真の宗教』の構成と概要
第5章　『カトリック教会の道徳』と『真の宗教』との比較
第6章　愛と自由

そこでまず『カトリック教会の道徳』という作品を取り上げ、その作品について見ることにしよう。

第1章　『カトリック教会の道徳』という作品

アウグスティヌスは、37歳の年になる391年から75歳で逝去する430年までのおよそ40年の間、聖職者として生きた。しかも、そのうちのほとんどはその最高責任者である司教としてであった。

『カトリック教会の道徳』という作品は、彼が聖職に叙任される前に書かれたものであり、いわゆる「回心」をしてからまだそれほど時間を経過していないもっとも初期の著作として位置づけられているものである。

アウグスティヌスの「回心」の出来事は、古代キリスト教の歴史の中でも、とりわけ有名な出来事として今日まで語り継がれているが、31歳で「回心」を経験した彼の前には、それまで歩んできた中で未解決になっていたさまざまな問題が立ちはだかっていたと思われる。

また、「回心」を経験することによって、彼の人生には新たなる可能性が開かれると共に、他方では、新たな問題が生じてきたとも言えるであろう。とくに彼がそれへと「回心」したところのカトリック教会や聖書について、いろいろと新たに学ぶ必要が生じたことは想像に難くない。しかも、彼がそれまで歩んできた中で、そのうちに九年間も留まっていたところのマニ教の共同体のことについては、それがその時代のキリスト教の一つの形を標榜するものであったがゆえに、カトリック教会との対比において沈黙を通すことは不可能であったと思われる。

マニ教に対する批判は、アウグスティヌスが聖職に叙任されることによってますます拍車がかかることになるが、この批判は、彼自身が以前マニ教に属していたということや、かつて自分が懸命にマニ教徒へと勧誘した仲間が依然としてそこに留まっていた、というような事情も手伝い、けっしてドライなものとは言い難いものがあった。

そのような彼の思いが最初に表出されたのが、この『カトリック教会の道徳』という作品であり、それは「回心」から二年後の388年のことであった。じっさい、この作品の正式な表題は、『カトリック教会の道徳とマニ教徒の道徳』というものであるが、ここでは『カトリック教会の道徳』として表記することにする。

ところで、この作品とほぼ同時期に執筆された『マニ教徒を反駁する創世記注解』については、

その動機について、『カトリック教会の道徳』の最初の部分に、「マニ教徒が無知と不敬から旧約の律法に対して非難中傷し、かつ自己宣伝の材料としたことを論難した」(1, 1) と記されている[1]。

『カトリック教会の道徳』においても、その執筆のきっかけとしては、マニ教徒が聖書を批判していること、そして自らの純潔な生活と異常な禁欲を自慢していることがあげられている (1, 2)。

ただ、アウグスティヌスとしては、病気の彼らを攻撃するというよりはむしろ癒したいとしており、新約聖書の証言をする場合でも、マニ教徒が聖書として認めているものに限っており、教会の権威は本来理性に先行すべきであるが、マニ教徒は理性をまず主張するので、この作品でも彼らのやり方に従うというように、できるだけマニ教徒の立場に寄り添うようなスタンスで関わっているのである (1, 2−2, 3)。

第2章 『カトリック教会の道徳』の構成と概要

さて、それでは『カトリック教会の道徳』という作品はどのような構成になっているのであろうか。先に触れたように、その正式な表題は、『カトリック教会の道徳とマニ教徒の道徳』というものであり、じっさい、二巻から成る本書の第1巻は「カトリック教会の道徳」を扱っており、その第2巻が「マニ教徒の道徳」を扱っている。

さて、その中でも本論と関わってくる第1巻の構成であるが、大きく二部から構成されており、さらに、第1部は二章から、第2部は四章から成り立っているので、それを記すと次のようになる。

第1部　幸福と愛
　1．幸福
　2．愛の法
第2部　徳と教会
　1．徳
　2．諸徳
　3．徳と愛
　4．徳行の規範である教会

それでは、全体としてこの作品にはどのようなことが書かれているのであろうか。

まず、第1部の「幸福と愛」では、私たちはみな幸福な生活を送ることを望んでいるということが確認され、幸福な人とはどのような人かが問われる。

自分の望んでいるものを持っていない場合、望んでいるものを持っていてもそれが有害なものである場合、よいものを持っていてもそれを持ちたいと望まない場合には、いずれも幸福であるとは言えないことから、人が自分の最高の善を望むとともに獲得している人こそが幸福な人であると見なされる。ここで享受するという言葉が用いられ、それは愛するものを所有することと説明され、最高の善を享受することこそが幸福な人と呼ばれるのである。幸福な人はまた、それよりもすぐれているものが他にないような善、すなわち私たちが最高善と呼んでいるものに達している人とも言われる。

続いて、最高善とは何か、ということが問われ、人間とは霊魂と身体から成り立つ、という議論から、霊魂をもっともよいものとするものこそが人間の最高善と呼ばれるべきであり、それは神にほかならない、ということが導かれる。

ここまでは、マニ教徒のやり方にならって理性を重視してきたが、ここからは、マニ教徒自身も容認している福音の言葉、パウロの言葉によって話を進めていく。すなわち、2節の「愛の法」の場面である。

人間は自らにとって最高善である神を、どれほど愛さなければならないか、ということが問題にされ、そしてその中で、神を追求することは幸福を望むこと、神を見い出すことは幸福そのものであることが言われ、神を追求するとは、神を愛することにほかならず、それは、「心をつくし、霊魂をつくし、精神をつくして、あなたの主なる神を愛せよ」ということに他ならないと言われるのである。

人間の最高善とは、それに一致する人を完全に幸福にするものに他ならない。そしてそのような善はただ神のみであり、私たちがこの神に一致しうるのは、たしかに、愛 dilectio、愛 amor、愛 caritas のみによるのである。

続く第2部の「徳と教会」では、まず「徳」について論じられる。ここでいう「徳」とは、従来、

ギリシャに由来する哲学において言われる「節制」「剛毅」「正義」「賢慮」を指しているが、「徳とは私たちを幸福な生活へ導くものであるから、私はあえて、徳とは神に対する最高の愛に他ならない」と見なすのである。したがって、上記の四つの徳は、「愛」という言葉によって説明されることになる。

すなわち、「節制」とは、自分の愛するものに自分のすべてをささげる愛であり、「剛毅」とは、自分の愛するもののためにすべてのことを喜んで耐え忍ぶ愛であり、「正義」とは、自分の愛するものだけに奉仕し、そのために正しく支配する愛であり、「賢慮」とは、愛にとって有害なものと有益なものとを明敏によりわける愛であると、このように言われるのである。

続いて、これら四つの徳の一つ一つについて検討がなされた後、改めて、「徳と愛」との関係については次のように説明される。

神は人間の最高善であり、最高善を求めることはよく生きることであり、よく生きることは、心をつくし、霊魂をつくし、精神をつくして、神を愛することである。そして、神に対する愛が無傷に腐敗することなく守られることが「節制」であり、あらゆる災いにもひるまなくなるのが「剛毅」であり、他の何ものにも仕えなくなるのが「正義」であり、誤謬と欺瞞が忍び込まないように事物を識別するに際して警戒するのが「賢慮」である。

続いて問題とされるのが、神を愛することと自分自身を愛すること、隣人を愛することとの関係であるが、アウグスティヌスによれば、神を愛する人だけが自分自身を愛しうるのであり、自分以上に神を愛するとき、正しく自分自身を愛することになる。そのことから、隣人にも、完全な愛をもって神を愛するように、愛さなければならない、と言われるのである。

最後に、「心をつくし、霊魂をつくし、精神をつくして、あなたの主なる神を愛せよ」「隣人を自分と同じように愛せよ」、この二つの掟にこそ全律法と預言者とがかかっており、それが教会全体、すなわちキリスト教信者に与えられた生活の規範であることが確認され、そこにこそカトリック教会の道徳が示されることになる。

第3章　『真の宗教』という作品

それでは次に『真の宗教』という作品について取り上げることにしよう。

この作品は、『カトリック教会の道徳』が執筆されてからおよそ二年後にあたる390年頃、すなわち、アウグスティヌスが司祭になる直前の時期に執筆されたものである。『カトリック教会の道徳』と同様に、マニ教を反駁する意図を持って書かれたことは間違いないが、両者共に、いわゆる反駁書というよりは、それとの対比においてカトリック教会、キリスト教の真実性を述べたものとして位置づけることができるであろう。

『真の宗教』についての執筆の企画については、「回心」直後から芽生えていたようであり、最初期に書かれた『アカデミア派駁論』においてすでに述べられている。

そこで次に、『真の宗教』の構成と概要について検討することにしよう。

第4章　『真の宗教』の構成と概要

『真の宗教』は、序文から始まり、本文は五部から構成されており、最後に結論の部分がくる。全体の構成を示すとおよそ次の通りである。

序　文
第1部　作業全体の展望
第2部　悪と再生（救済）について
第3部　善の創造　悪はどこから
第4部　人間の救済の二様の道
第5部　理性による神への帰還
結　論

それでは全体としてこの作品にはどのようなことが書かれているのであろうか。

『カトリック教会の道徳』においては、主として比較の対象とされていたのはマニ教であったが、ここでは、マニ教を含めた異教の哲学や宗教、異端などとの比較において、カトリック教会のうちに真実性があることが主題となっている。

「序文」では、哲学者は自分たちの学派の学校ではそれぞれ別の事柄を教えながら、他方で、同

じ神殿で礼拝を捧げていたが、「真の宗教」は、そのような異教の哲学のうちに求められるべきではなく、また、異教徒たちの混乱の中にも、異端の汚物の中にも、離教者の無気力さの中にも、ユダヤ教の盲目さの中にも求められるべきではなく、ただ公同的キリスト教であるカトリック教会の中にのみ求められるべきことが言われる。

第１部の「作業全体の展望」では、まず、カトリック教会の宗教が受け入れられるべきであることが明言されるとともに、この宗教に対して追求すべき主題は、「人類救済のために人類を永遠の生命へと改革し再生するところの神の摂理の時間的な配剤の歴史であり預言である」と言われている。また、はじめに権威によって導かれて信じたものを、後に理性によって知解することの重要性が指摘される。さらに、本書の意図として、カトリックの信仰がいかに確かなものであるかを、カトリックの見解を受け入れられるように人々を動かし服従させようとする彼らの見解が、いかに心を攪乱するようなものではないかを、主が与えようと意図した根拠にしたがってできるかぎり明らかにすることであると言われている。さらに加えて、そこでは、マニ教の二つの原理、二つの魂の主張が誤謬として斥けられるとともに、三位一体の永遠性と被造物の可変性を認識することが意図されていることが示されている。

第２部の「悪と再生（救済）について」では、まず、すべての生命は神に由来すること、神は最高の生命であり生命の源泉そのものであること、生命は生命である限り悪ではなく死へと向かう限りにおいて悪であることが言われる。

そしてそのような存在論的な枠組の中で、人間の堕罪と贖罪の問題が説明され、端的に人間の悪とは罪と罪の罰であることが言われる。

しかしながら、魂は朽ちゆくものを享受することによって、自己の意志に反して自らが養ってしまった邪欲を打ち滅ぼし、また、精神をつくして善なる意志をもって神に仕えつつ、その邪欲を滅ぼすために神の恩恵によって助けられると信じるならば、疑いなく魂は新しくさせられ、多くの可変的なものから唯一の不変的なものへと向きを変え、連れ戻されるとされる。

創造されたのではない、むしろそれによって宇宙が創造されたところの知恵によって魂は再生（創造）され、神の賜物であるところの聖霊を通して、神を享受するのである。聖霊を与えられた魂は癒され、平和になり、聖なるものとなるのみならず、肉体そのものも活かされ、その本性においてもっとも清いものとなる。

魂が神に仕え、肉体が魂に仕えることが完全に行われるならば、如何なる実体も悪でないだけでなく、実体はいかなる悪によっても影響されることはないのである。

こうした悪と再生のプロセスがここでは述べられているが、そのことを可能にするのが、歴史上に顕現された神の救済の業であり、それは、旧約から新約へと貫かれており、なかでもその最大の出来事が神にして人なるイエス・キリストの受肉なのである。

第３部の「善の創造　悪はどこから」では、この世界のすべてのものは神から創造された善いものであるが、無から創造されたという側面もあり、それが被造物の可変性につながっていく。ただ、あくまでも実体は善であり、魂の悪とは、魂の本性ではなく、むしろ魂の本性に反対するもの、すなわち、罪と罪の罰以外の何ものでもないことが再度確認されるのである。

第４部の「人間の救済の二様の道」では、神の摂理と、言葉では言い尽くすことのできない神の慈愛とによってもたらされる魂の医薬についてまず語られ、その医薬は大きく権威と理性とに区分される。権威は信仰を要請し、人間を理性へと準備するものであり、理性は、理解と認識へと導く。

神の摂理は個々人の人間を個人的に助けるだけでなく、全人類を公的に助ける。

神の摂理及び救済は、一人の人間の中で、外なる人、内なる人に即して、六つの段階あるいは時期に分けられる。それと同様に、アダムからこの世の終わりまで、神の摂理の法則の下に支配される。

また、救いのもう一つの手段である理性について、不変の法則、すなわち理性がそれによって判断する真理はその理性よりもすぐれており、神は、理性がそれに従って判断するところのかの最高の法則なのである。

第５部の「理性による神への帰還」では、偶像

崇拝の不敬虔は被造物への愛から生ずることが言われる。それは、知的被造物であれ、生殖的生命であれ、動物であれ、物体であれ、全世界とそれを生かす生命力であれ、それらのものへの崇拝が批判されるだけでなく、唯一の神に隷属しないこともその中には含まれるのである。なぜなら、唯一の神に仕えないことは、肉の欲、この世の欲、目の欲を免れえないからである。

しかし魂は悪徳そのものによって根源的な美を探究するように促されるのである。ここに、「外に出て行くな、あなた自身の中に帰れ」という言葉が登場する。真理は内的人間に住んでおり、あなたの本性が可変的であると見出すならば、あなた自身をも超えよと言われるのである。

また、神への帰還との関連で、真の隣人愛の在り方について、完全な正義について、聖書解釈の原理について言及される。

「結論」では、偽りの宗教を去り、真の宗教へと向かうことが言われ、この世の被造的なものを崇拝すべきではなく、宗教 religio の語源である religere「結びつける」にも示されるように、私たちを唯一の全能なる神に結びつけるべきことが最後に確認される。

第5章　『カトリック教会の道徳』と『真の宗教』との比較

以上、『カトリック教会の道徳』と『真の宗教』の二つの著作について、その構成と内容を中心に見てきたが、本章では、この二つを比較しながら、アウグスティヌスの問題意識の深まり、変化について検討することにしたい。

そこで、大きく六つに分けて、⑴神 ⑵被造世界 ⑶被造物の神との関わりとしての愛 ⑷権威と理性との関係 ⑸旧約聖書の位置づけ ⑹両者の相違点の順に述べていく。

⑴　神

『カトリック教会の道徳』においては、すべての人間は幸福な生を求め、望むことから、幸福をもたらすものとしてそれよりもすぐれているものが他にないような善が想定され、そのようなもっとも善いもの、すなわち最高善として神が理解される。そして最高善が存在するとすれば、それは人の意志に反して奪われるようなものではない（3, 5）と言われる。

また、神については、キリスト教的な神の捉え方として、いわゆる三位一体なる神という名称が登場してくる（14, 24）。そして、人間が神と一致する働きにおいては聖霊が何某かの役割を果たしていることが示される（13, 23）。

それでは『真の宗教』においてはどうであろうか。この著作において注目を惹くのは、すべての生命は神からくる（11, 21）という表現にも見られるように、神を最高の生命、生命の源泉そのものとして捉えていることである。そしてその関連で、生命は生命である限り悪ではなく、死へと向かう限りにおいて悪である（11, 21）ということが言われる。また、神について最高の存在（essentia）という表現も見られる。存在するものはすべてそれが存在する限り、その存在に由来している。なぜなら、存在するものは、それが存在する限り善であるからである、と言われているとおりである。あるいは、最高の存在は存在するすべてのものを存在たらしめており、そのゆえに存在と呼ばれている（11, 22）とも言われている。

三位一体としての神という表現ももちろん散見されるが、それ以外のところではたとえば、「創造されたのではなく、むしろそれによって宇宙が創造されたところの知恵によって魂は再生（創造）され、神の賜物であるところの聖霊を通して神を享受する」（12, 24）という表現にも見られるように、父子聖霊の働きを探求しようとする試みがなされており、これは『カトリック教会の道徳』には見られなかったことである。とくに、子の働きに対応すると考えられる「真理」や「形相」はこの著作の一つの主題とも言えるほど重要な役割を果たしている。

⑵　被造世界

『カトリック教会の道徳』においては、被造世界の中で問題となっているのは人間、しかも霊魂を持つものとしての人間である。プラトン的な思考の影響を受けているアウグスティヌスにおいては、いわゆる、神＞霊魂＞肉体という図式が存し

ていることは確かであるが、この作品においては、そのことについてそれ以上の詳述がなされているわけではない。

被造世界において人間以外の存在があることはもちろん想定されているが、たとえばそれは、正義について「神のみに奉仕し、そのために従属している他のものに正しく命令する愛」と言われるような形であって、あくまでも被造世界それ自体に即しての積極的な考察がなされているとは言い難い。

それでは『真の宗教』においてはどうであろうか。被造世界は、すべて神から由来することがこの作品では強調されている。いやそれ以上に、この世界におけるすべてのものが神の何らかの痕跡を残していることを探究することに一つの課題があると言っても言い過ぎではなく、たとえばそれは次のような言葉に示されている。すなわち、「すべてのものはこの三位を同時に持っているからである。そしてそれはある固有なものであり、その固有な形相によって他のものから区別され、事物の秩序からはみ出すことのないものなのである」(7, 13) と。

もちろん、被造世界の中で一番問題となっているのは、『カトリック教会の道徳』と同様に人間、人間の魂である。しかしここでは、その人間の魂が堕罪したこと、そしてそこから救済されなくてはならないことが問題とされており、それはアウグスティヌスの次の言葉にも見てとれる。「この宗教（＝キリスト教）に対して私たちが追求すべき主題は、人類救済のために人類を永遠の生命へと改革し再生するところの神の摂理の時間的な配剤の歴史であり預言である」(7, 13) と。そのプロセスの中で、人間は自らの肉体や物体的被造物とどのように関わるべきか、ということが問題とされるのである。

⑶ 被造物の神との関わりとしての愛

『カトリック教会の道徳』においては、被造物の神への関わり方、より具体的には人間の神への関わり方として「最高善である神を愛する」ということが求められており、その愛し方については「心をつくし、霊魂をつくし、精神をつくして、あなたの主なる神を愛せよ」という聖書の言葉がそのまま用いられている。

神に対していわば全身全霊で愛することによって、人間は、神に付着し (11, 19)、神のもとに帰っていき (12, 21)、神と一致する (13, 22；13, 23 ； 14, 24) のである。そうすることにより、いかなるものも私たちを神から引き離すことはなくなるのである (11, 19；12, 20)。

人間は結果として神と似たものとなるのであるが、それはあくまでも結果としてであって、それは神への従属によるものである (12, 20)。こうして、人間はただ神からのみ支配を受けることになる。

このことは四つの徳のうちの「正義」のところで次のように述べられている。「自分の愛する神、すなわち最高の善、最高の知恵、最高の平和に対して心からなる奉仕を示し、他のすべてのものを、あるいはもはや自分の支配下にあるものとして治め、あるいは支配するように努力する、という規範を与えてくれる」(24, 44)。

しかし反対に、最初から神に似たものになろうと望むと、必然的に神から離れざるを得なくなる。このあつかましさは、神のように自立したものでありたいという望みを霊魂のうちに起こすことになる (12, 20) のである。

ところで、「神を愛する」ということは、「自分自身を愛する」こと、あるいは「隣人を愛する」こととどのように関係しているのであろうか。それについては、神を愛する人だけが自分自身を愛しうるとされ (26, 48)、自分以上に神を愛するとき、あなたは正しく自分自身を愛するのであり、隣人にも、完全な愛をもって神を愛するように、接しなければならない (26, 49) と言われるのである。

それでは『真の宗教』においてはどうであろうか。『カトリック教会の道徳』のように、「神を愛する」ということが必ずしも前面には出ているわけではないが、「神を愛する」ということがらそのことに注目するならば、たとえば、次のような箇所が取り上げられる。

「精神をつくし善なる意志を持って神に仕えつつ、その邪欲を滅ぼすために神の恩恵によって助けられると信じるならば、疑いなく、魂は新しくさせられ、多くの可変的なものから唯一の不変的

なものへと向きを変え、連れ戻される」(12, 24)。

また、次のような箇所も注目することができる。「魂が神に仕え、肉体が魂に仕えることが完全に行われるならば、如何なる実体も悪でないのみならず、実体は如何なる悪によっても影響されることはない」(16, 32)。

さらに、次のような箇所もある。「霊的な人間は、……最も純粋に知り、かつ知ったものをまったく愛を持って愛するとき、神と共にあるのである」(31, 58)。

さらにまた、真理としての神との関係で、「真理自身と適合しなさい。……真理はそれ自身を求めないが、あなたは求めることによって真理そのものに達する。精神の愛着によって達する。最高の霊的愉悦によって、自らの中に住まっているものと適合する…」(39, 72) と言われている。

ところで、「神を愛する」ことと「自分自身を愛する」こととの関係については次のように言われている。「すべてを判断するが、自分自身はだれからも判断されることのない霊の人、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして神を愛する』霊的な人、『おのれの隣人を肉的にではなく、おのれの如く愛する』霊的な人が生まれる。彼の中に息づいている一切をあげて、神を愛する者は自らを霊的に愛している」(12, 24) と。

また、「自分自身を愛する」ことと「隣人を愛する」こととの関係については、「愛している人から奪い去られることのできないものだけを愛している人は、疑いなく打ち負かされることはない」(46, 86) と言われた後に、「自分のために起こるよう望んでいるよいことがらが他の人にも起こるように望むこと、自分のために起こることを望まない悪いことがらが他の人にも起こることを望まないこと、そうした心をすべての人に対して持つこと、それが愛の規準（regula dilectionis）である」(46, 87) と言われている。

さらに、「他者をおのれの如く愛するところの人は、他者の中においておのれ自身であるところのものを愛すべきである」(46, 89) と言われている。それは、「人間の中に人間以外の何ものをも愛さないこと、すなわち、神の像に従って創造された被造物以外の何ものをも愛さない」(47, 90) ことになるのである。

⑷　権威と理性との関係

『カトリック教会の道徳』においては、権威から理性という順序で考察することが妥当であることを認めつつも、マニ教それ自体が、理性を尊重するという立場から、相手側に寄り添うような仕方で、理性で明らかになる限りにおいて探求を開始する。しかし理性の限界と権威の重要性については十分に認識しており、途中からは聖書の権威に従いながら論が展開されていく。

一方の『真の宗教』においては、権威と理性とは人間の救済の二様の道として見なされ、神の慈愛によってもたらされる魂の医薬として位置づけられている。権威は信仰を要請し、人間を理性へと準備し、他方、理性は理解と認識へと導く。神の摂理と関わる時間的なことがらに対する信頼は、知解することによってよりも信ずることによってより力強いものとなることが言われ、最初は、権威の道に即して論が進められるが、その後、救いのもう一つの手段である理性に対して焦点が向けられ、理性の道に即した論へと移行していく。

第1部の「作業全体の展望」において、「はじめに権威によって導かれて信じたものを、後に理性によって知解する」(8, 14) と言われているとおりの順となっている。

⑸　旧約聖書の位置づけ

マニ教徒が否認する旧約聖書をどのように位置づけるか、ということは初期のアウグスティヌスにとって決して小さな問題ではなかったと思われる。

『カトリック教会の道徳』においては、新約聖書に関しても、マニ教徒が大きな信頼をおいている福音書やパウロの言葉に限定し、それとの関係で注意深く旧約聖書からの証言を取り上げ、内容的にそれが新約聖書と一致しているという手法で論を進めていく (9, 14)。

また、霊魂の健康をもたらすものとしての教育については、懲罰による恐怖と教導による愛があるが、旧約聖書においては愛よりも恐れの方が大きく、それはまだ旧約の時代には自由の時代が到来していなかったから (28, 56) と説明されている。

一方の『真の宗教』においては、直接マニ教を

意識しながら聖書を扱っているという印象は見受けられない。また、旧約聖書については、その新約聖書との違いを認めながらも、それは時代とその置かれた状態の違いによるものとして説明している。たとえば、両者の違いについて、次のように述べられている。

「医術は同じであり決して変化しないのだが、病人に対する処方は、私たちの健康状態が変化するのであるから変えられるように、神の摂理はそれ自体まったく変化しないのであるが、可変的な被造物をさまざまな仕方で助け、病気のさまざまな状態に対応して、それぞれにふさわしいことを命じたり禁じたりするのである」(17, 33) と。

⑹ 両者の相違点

『カトリック教会の道徳』は、キリスト教の徳を確立することにひとつの目標が置かれていたこともあり、節制、剛毅、正義、賢慮という四つの徳の探求を行ったのであるが、それと同時に、それらの古代の道徳を、キリスト教の愛のうちに包摂しようとすることを試みていたために、すべて愛という言葉を用いてこれらの徳を定義しようとしたのである。

このような試みは、もちろん『真の宗教』においては行われていない。それはこの作品はキリスト教の道徳というよりも宗教性を重視しているからであり、人間がそのうちに形成する徳よりも、神との結びつきがより問題とされているからであると考えられる。

また、『カトリック教会の道徳』では、罪についての理解がその当時なされていない、ということはないだろうが、罪とその罰についての言及はほとんどなされていないと言ってよいだろう。しかるに『真の宗教』では、まさしく人間の堕罪とそこからの救済乃至は再生というものが問題となっており、そのことが前者では最高善として神を捉えるのに対して、後者では、最高の生命として神を捉えることにもつながっているように思われる。

第6章　愛と自由

前章では、『カトリック教会の道徳』と『真の宗教』の共通点と相違点を通して、アウグスティヌスの問題意識の深まりや変化について垣間見たが、本章では「愛と自由」の関わりの問題について検討することにしたい。

この二つの著作で、もっとも問題となる「愛」は、被造物、とくに人間の魂の神に対する「愛」である。たとえば、「最高善である神を愛する」ということが『カトリック教会の道徳』の中心テーマとなっていた。

それでは、神を愛するとはどういうことであろうか。それについては、神に近づくこと、神に似ることであると言われる。しかもそれは、結果的に神に近づくこと、結果的に神に似ることという表現がなされている。神に等しくなろうとか、神に自らを似せようとか、そのような態度とは明確に区別されるのである。こうしたことから、神に近づくことは、別の言い方では神に従属することであるとも言われている。

また、神を愛することは最高善としての神を所有することであり、それは神を享受することであるとも言われる。

神への従属、神の享受の両方の要素を合わせた表現として、神の支配の所有、享受という用例も見られる（『真の宗教』12, 23；13, 26）。

このようにして、次のような表現もまた見い出される。「霊魂は自分を神に等しくすることではなく神に従属させることを熱望する愛によって、神のもとに帰っていく。霊魂はそこで誠意と熱意を示せば示すほど、それだけ大きな幸福と高揚を受け、神のみの支配を受けて完全に自由なものとなる」（『カトリック教会の道徳』12, 21）と。

こうして、人間が神を愛することは、人間が神を享受するとともに神からの支配を受けることを意味するものであり、そこにおいて人間は自由となるのである。

ここでは、愛するということが、相手に従属する、相手から支配を受けるということを経て、自由になると言われている。

一見すると、従属すること、支配されることが自由になるということと結びつくことは奇異にも感じられる。なぜならば一般には、自由になるということは、相手への従属や相手からの支配から解放されることであると考えられるからである。

しかしアウグスティヌスによれば、相手からの支配や相手への従属は、必ずしも不自由であることを意味しない。むしろ、被造物としての人間は、本来的に相手とのつながりを前提としているのであり、それは相手を享受するという言葉にも現れているし、隣人愛に対する彼の積極的な評価にも認められるのである。

つながりの中で生きていくことによって得られる自由、これは、アウグスティヌスがこの二つの著作の中で強調していたことであり、その中で、とくに神とつながっていくことは、方向の転回、立ち帰り、改革、神の国への回心（『真の宗教』52, 101）などの用語を用いながら、神への愛と神からの愛とが、いわば交錯するところに生起する真の自由として理解されていたのであった。

註

(1) アウグスティヌスの日本語訳に関しては、基本的には、それぞれ『カトリック教会の道徳』（熊谷賢二訳、キリスト教古典叢書 2、1963 年、創文社）、『真の宗教』（茂泉昭男訳、アウグスティヌス著作集 2、1979 年、教文館）を使用し、必要に応じて、訳を修正した。なお、本文中の引用はすべて引用後に（○○, ○○）という形で記すことにした。

Augustine on *amor* et *libertas* in *De Moribus Ecclesiae Catholicae* and *De Vera Religione*

Kikuchi, Shinji*

アウグスティヌスの初期の著作の中から、『カトリック教会の道徳』と『真の宗教』の二つの著作を取り上げ、「愛と自由」の関わりの問題を考察する。

両者は共に、アウグスティヌスが司祭職に叙任される前に執筆されたものであるが、キリスト教の真実性を、前者はその道徳的側面に着目し、後者はその宗教的側面に着目しながら展開していく。

共通点としては、神を最高善乃至は最高の生命と捉えながら、神に対する人間の愛の重要性を強調しており、神への愛については、神に近づくこと、神に従属すること、そしてそのような仕方で、人間は自由になるという論を展開している。

また、神への愛は、自己への愛、隣人への愛を可能にしていくものであり、愛と自由の根底にはつながりという共同体性が見い出されるのである。

キーワード：自由，愛，共同体

**Nagoya Ryujo Junior College*